

聖書：士師記 17：1～13

説教題：正しいと見えることを

日時：2014年12月28日

士師記の残り5章は、これまでの続きではなく、同じ時代を別の観点から書き記したものです。これまでとの違いではっきりしていることは、これからの部分にはさばきつかさが出て来ないことです。これからはイスラエル内部の問題や社会的状況に目が向けられています。特にここでは2つの出来事が取り上げられ、一つは17～18章に、もう一つが19～21章に記されています。

多くの注解書を見ますと、この17章～21章は士師記の「付録」として位置付けられています。確かにこれまでの12人の士師たちによる華々しい活躍の記事と比べると、読んでいてあまり面白くありません。それだけならまだしも、一体これらの記録に何の意味があるのだろうかと思ってしまうような内容ばかりです。そのため士師記の本論は16章までで、残りの部分はこの時代が社会的にどうだったかをレポートする「巻末参考資料」と位置付けられるのも分からなくはありません。しかしある一つの注解書では違う位置付けがされていました。その本は、これからの5章に「クライマックス」とつけていました。こう言われると俄然読む態度が変わって来ます。ここは読んでも読まなくても良い参考資料ではなく、士師記の著者がいよいよ「士師の時代はこうだったのだ！」と重要な証言をしている部分である。ですからここを読まなくては士師記を本当に読んだとは言えない、と。だとするならば、私たちはこれからの部分こそしっかり読み、この書のメッセージを受け取って行かなければならないということになります。

まずエフライム出身のミカの言葉からこの章は始まります。2節：「彼は母に言った。『あなたが、銀1100枚を盗まれたとき、のろって言われたことが、私の耳にはいりました。実は、私がお金を持っています。私がそれを盗んだのです。』すると、母は言った。『主が私の息子を祝福されますように。』」最初から困惑する始まりです。盗みはもちろんすべて悪ですが、信頼関係があるべき親子の間にさえ裏切り行為が生じていた。しかし母はこれを聞いて祝福の祈りをします。なぜでしょう。息子の悔い改めを嬉しく思ったからでしょうか。そうではないでしょう。ミカには罪を悲しんでいる様子はありません。彼が告白した理由はただ一つ、呪いを受けたくなかったからです。ではなぜ母はそんな彼のために祝福を祈ったのか。理由は息子と同じでしょう。彼女は盗んだ人に呪いを！と祈りましたが、今や犯人が息子だと知ります。しかし呪いは取り消せません。そこで彼女は呪いを相殺するための

祝福を祈ったのです。これは一種の魔術的な考えです。呪いが力を持ってわが子に降りかからないように、急いで反対の祝福の祈りを加えた。このようにミカもその母も、頭にあるのは、どうしたら災いから逃れられるかということばかり。犯した罪の道徳的責任は省みられていません。この時代はこういう状態であったと士師記の著者は書いているのです。

しかしこんな程度では済まないのが士師記です。母は戻って来た銀を聖別して主にささげ、その銀でわが子のために彫像と鑄像を造ろうと言います。これは良いのでしょうか。申命記 27 章 15 節にはこうあります。「『職人の手のわざである、主の忌みきらわれる彫像や鑄像を造り、これをひそかに安置する者はのろわれる。』民はみな、答えて、アーメンと言いなさい。」そしてでき上がった物をどこに置いたかという、ミカの家にあった神の宮にでした。私たちは再び困惑します。果たして宮を個人的に持って良いのだろうか？と。申命記 12 章を見ると、主はイスラエル人に、ご自身の御名を置くために全部族の内から選ぶただ一つの場所を尋ねて、そこへ行かなければならないと言っておられました。その場所とは 18 章 31 節に出て来ますようにシロという町です。このシロはイスラエルのほぼ中心地、エフライム族の割り当て地にありました。ですからエフライム在住のミカにとっては遠くない。全部族の中でも最も近いところに住んでいます。なのに彼はそこに行かず、勝手にプライベートな宮を造って信仰生活をしているつもりでいた。そしてエポデとテラフィムも持っていた。さらにミカは息子の一人をこの宮の祭司として任命していました。律法で祭司はレビ人の中のアロンの家系の者のみと制限されていましたが、そんなことは丸つきり無視。したい放題のことを勝手にこなしています。

このような状況を士師記の著者はこうコメントします。6 節：「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」これは士師記の一番最後の 21 章 25 節と同じです。すなわち 17 章～21 章は、すべてこの御言葉の下で考えられ、まとめられるということです。「イスラエルには王がなく」という言葉は、この士師記の著者が、この後のイスラエル王朝時代を知っている人であることを示しています。王制が取られることそれ自体がすべての問題を解決するわけではありませんが、イスラエルにおいて王は神の支配を実現するしもべであり、その王が「いない」状況は、神の統治がまるでないような状況であったことを示しているでしょう。その結果、6 節後半にあるように「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」主の御心は何か、御言葉に基づいて自分の生活を律し、導かれるのではなく、自分勝手なアイデア、意見、考えによって、それぞれが思うがままに生活している。これでは社会秩序は混乱し、それ以上に道

徳的・靈的に墮落する一方だったのは、けだし当然と言わなければならないでしょう。

7 節以降も同じです。そこで一人の若いレビ人が滞在するところを見つけに旅に出ます。レビ人にはイスラエル全域から 48 の町々が割り当てられていました。彼らは祭司を助け、礼拝の奉仕をし、律法を教え、その奉仕によって生活を支えられるべき人たちでした。その彼がこのようにさまよい歩いていたことは、彼が民によって正しく支えられていなかったことを暗示します。つまり正しい信仰生活がイスラエルでは営まれていなかった。それで彼は仕事はないものか、どこかに定住できないかとフラフラ歩き回っていた。そんな彼にミカが会って声をかけます。10 節：「そこでミカは言った。『私といっしょに住んで、私のために父となり、また祭司となってください。あなたに毎年、銀 10 枚と、衣服一そろいと、あなたの生活費をあげます。』それで、このレビ人は同意した。」先に述べたように、祭司はアロンから出た者でなければなりません。しかしこのレビ人は 18 章 30 節から分かりますように、モーゼの子ゲルシヨムの子ヨナタンという人でした。つまり彼はアロンの子孫ではありません。なのに彼はこの招きを受け入れた。主に物質的関心からそうしたことは明らかです。主からの召命に従ってではなく、いい働き口があったから、またとない収入のチャンスがあったから、これを受け入れた。そんな彼ですから、もっと良い条件の働き口があると、軽々とそこに移って行くのを私たちは次の章で見ることになります。

そしてこの章最後の大いなる皮肉は 13 節のミカの言葉です。「そこで、ミカは言った。『私は主が私をしあわせにしてくださることをいま知った。レビ人を私の祭司に得たから。』」ミカは息子を祭司に任命したものの、うまく行かなかったのでしょうか。そんなところへレビ人がやって来ました。確かに祭司はアロン系の者になるべきですが、この人はレビ人だから十分良いのではないか。ミカとしては、願っていたところにおあつらえ向きの人が来たので、これぞ主の摂理と思ったでしょう。主がこの人を遣わして下さったのだ。これは主が私を祝福して下さるしるしだ！ハレルヤ！私は今こそ幸せになれる！しかし次の章を見ると、この彼の確信は間違ったものであったことが分かります。主から出たものでないのに、勝手に主のみこころと読み違え、幸せな気分浸っている。何と愚かで、あわれで、こっけいな姿でしょうか。これは自分の目に正しいと見えることを行なった者が行き着くあわれむべき姿です。

以上のような士師記 17 章から私たちが学ぶことは何でしょうか。その一つは、自分の目に正しいと見えることを行なう生活をもたらす混乱です。今日の箇所を讀ん

で思うことは、あらゆることがどこかおかしいということ。なぜこんなことになっているのでしょうか。それは信仰と生活の唯一の規範である神の言葉が軽んじられ、その代わりに気まぐれで、いつ突飛なことを言い出すか分からない人間の考えが物事の判断基準になっているからです。そして恐ろしいことは、彼らの信仰が混合宗教に変わり果てていることです。たとえば3節で、ミカの母が主に「聖別」と言ったのは良いのですが、それで「彫像」を作ると言いました。最初ここを読んだ人は、どう評価して良いか、困惑しないでしょうか。いいような悪いような、全部悪いとも言えないが、だからと言って良くもないような……。どう考えたら良いのだろう、良く分からないなあ、まあいいのかな〜と容認してしまう。そうして非キリスト教的な要素がどんどん入り込み、ついにはまことの神信仰が骨抜きにされてしまう。これが恐ろしいことです。これは私たちの信仰生活にも十分に起こり得ることでしょう。私たちの目にも良いと見えることはたくさんあります。これこれのことをして楽しい時を過ごしたい、これこれの仕事につけば収入はもっと多くなる、こういう風にすれば職場や社会でもっと人々から評価される。しかしもしそれらが聖書の戒めとぶつかる時、どうするでしょうか。もし聖書に目をつぶり、自分の考えや願いを優先させるなら、ここと同じく「めいめい自分の目に正しいと見えることを行なっていた」となるでしょう。そしてその時点で、見せかけはキリスト教らしくても、結局は自分が上に立ち、自分が好き勝手に決定する宗教です。なのに、本人はあいかわらず自分は信仰者と思い込んでいる。道を大きく外れていることを知らない。

そしてもう一つ人間的な成功の危うさについてです。今日の箇所に登場する3人はいずれも成功しています。ミカは母に彫像を作ってもらい、プライベートな宮にさらにコレクションが増えました。さらに祭司としてレビ人を持つことができました。素晴らしい方向への発展です。彼の母も大金が見つかり、主に感謝をささげ、息子のために像を造りました。私は主にも良いことをし、我が子にも良いことをしたという満ち足りた気持ちでいたでしょう。レビ人もこの先生活がどうなるかと案じていたところ、良い条件、良い地位を与えられて将来への不安もなくなりました。みんな良いことばかり起こったのではないのでしょうか。しかし士師記の著者が示しているのは、これらはどれも主からの祝福ではないということです。ミカは主が私を幸せにして下さったと言っていますが、それは勝手な思い込みである。私たちはここから自分の目に祝福だと見えることが起こっても、それだけでは本当にそれが主からの祝福かどうかは分からないという警告を受け取ります。私たちも彼らのように思いがちではないのでしょうか。ミカの母のようにお金が入ったら神の祝福だ！

レビ人のように地位を確保し、生活が安定したら神の導きだ！ミカのような好ましいことが連続したらハレルヤ！と言わないでしょうか。しかしそれは私たちの目にそう見えるだけであって、主の前にはそうでないのです。ですから私たちは出来事の表面的な結果から主の祝福を推し量るのではなく、自らがみことばに従っているかどうかをまず問わなくてはなりません。そして主が下さる本当の祝福こそを受け取る者でなくてはならないのです。

そのことに関して、主がイスラエルに語ってこられたみことばを2箇所お読みして終わりたいと思います。申命記6章18節：「主が正しい、また良いと見られることをしなさい。そうすれば、あなたは幸せになり、主があなたの先祖たちに誓われたあの良い地を所有することができる。」申命記12章28節：「気をつけて、わたしが命じるこれらすべてのことばに聞き従いなさい。それは、あなたの神、主が良いと見、正しいと見られることをあなたがたが行ない、あなたも後の子孫も永久にしあわせになるためである。」本当の祝福は、主が正しいと見られることを私たちが行って歩むところに与えられます。自分の目に良いことを優先してキリスト教を変質させる自分勝手な宗教の中で、浅はかな喜びの声をあげる者ではなく、みことばに従う歩みの中で、主がくださる祝福を待ち望み、それにこそあずかせていただく歩みへ進みたいと思います。